

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520516

研究課題名（和文） 位相を意識した日本語使用を促す学習支援システムの研究

研究課題名（英文） Research on a CALL for promoting social-phase-conscious use of Japanese

研究代表者

才田 いずみ (SAITA IZUMI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20186919

研究成果の概要（和文）：社会で用いられている言語にはさまざまな変種があるが、日本語学習者が教室で接する日本語の種類は、中立的で限定的であることが多い。本研究は、場面や効果を考えて上手に日本語のバリエーションが使える学習者の育成を大目標に、学習支援システムを作成した。3つの言語行動「確認する」「意向を訊く」「申し出る」について、動画の視聴、短い会話形式の練習、表現選択の課題、口調・音調の適切性判断課題を盛り込んだ。また、役割語の使用例動画も提示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the research is to develop a computer-assisted language learning system which fosters the learners of Japanese who can select and use the socio-linguistically proper variations. in terms of the forms and intonation. The system equips three language behaviors: confirming the given instruction, asking the intentions and offering, with their video clips, speaking practices and the appropriacy judgement practices on the forms and intonation. In addition, video clips which have “role-languages” are presented.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：教材，教育メディア，日本語学習，社会的位相，スピーチレベル

1. 研究開始当初の背景

言語は、その社会が位相を異にするごとに言語自身の位相を異にしており、社会言語条件を考慮して適切に発話や発信が行えるように指導を行うことは、日本語教育において重要である。会話参加者や話題の人物などとの対人的な関係（親疎，社会的地位，性別など）や、用件に伴う力関係，場面の公私等々

の要素を踏まえて行う待遇表現の指導では、日本語の特徴の一つとされる敬語表現だけでなく、親しい間柄でのくだけた物言いや卑罵表現も含んだ指導が行われてきている。さらには、スピーチレベルシフトなども、教育項目の一つと捉えられてきている。

しかし、定延は、日本語教育学会 2007 年度秋季大会で、これまでの日本語教育では、

日本語学習者が「自分に合ったしゃべり方で日本語社会に参加できるようにする」ことが看過されてきているのではないか、社会的位相にばかり着目し、それ以外への目配りが不十分だったのではないか、という問題提起を行っている。これは、本研究代表者らが開発した発音学習支援システムに、自分が好ましいと思う話し方をする人の日本語音声を取り込み、それをモデルに、視覚情報も利用しながら練習を行う、というデザインを採用した(才田他 1993「学習者音声の自己評価と日本人の評価ー日本語音声学習支援システムを利用してー」)ことと通ずるところがある。

音声の実現だけでなく、日本語使用全般において、学習者が自分に合った日本語を選び取って用いることを可能にする環境を用意するのは、日本語教育に従事する者の責務であろう。

しかし、役割語や発話キャラクタについては未解明の部分も多く、学習者が使用した場合に母語話者その他からどのような評価を受けるかの研究もなされていない。よって、即座には、「どんな人物がどういうことばづかいをするのか」についての豊かなデータを示すことも、学習者に必要な学習環境を提供することもできないが、これを進むべき方向として見据えつつ、本研究を進めていく。

2. 研究の目的

日本語学習者にアクセスしやすい日本語リソースとして、いわゆる「教材」が挙げられる。教科書をはじめとする教材において学習者が接する言語バリエーションは、中立的で限定的であることが多い。本研究は、日本語学習者が日本語の種々の位相を意識し、場面や効果を考えてスピーチレベルや表現を選択使用することができるよう支援するべく、以下の3点を目的とする。

(1) 社会的位相に即した適切な表現選択のためのリソースの豊富化

従来から行われている待遇表現指導のラインに連なるもので、相手との関係や場面、話題を踏まえてどのような言語表現が適切であるかを理解する力、選択・表出する力を養うことを目的とする。

(2) 伝達のスキルおよびストラテジーへの配慮ある教材作成

学習者が選択した表現について、特に音声的にどのように実現されれば意図がよりよく伝達されるかを知り、それを実現するスキルを身に付けることを目的とする。

(3) 伝達スキルや役割語の使用に関する評価調査

「りきみ」「空気すすり」「発話者本人の社会的位相とは異なる役割語の使用」を含んだ材料を提示し、学習者の解釈・評価と、日本語学習者がそれらを使用した場合の日本人

からの評価についての調査を行い、その結果をシステムで扱う教材に反映する。

3. 研究の方法

本研究を進める上で行うべき作業は、大きく2つに分けて捉えることができる。1つは学習支援システムの構築と言語リソースの収集および教材作成であり、もう1つは役割語などの言語バリエーションに関する調査研究である。

(1) システム開発に関しては、以下の手順で行う。

① 本システムには動画の利用が不可欠なので、スムーズなアクセスのために、どのような基盤を用いるかを検討する。

② 社会的位相を意識した待遇表現指導にかかわる教材作成のため、どのような言語リソースを与えるか、場面その他の検討を行う。スピーチレベルの使い分けを示す点にも配慮する。

③ 適切な表現の習得や、伝達スキルの習得を目指す練習の方法について検討を行い、練習をデザインする。同時にフィードバック方法の検討も行う。

④ 上記の検討を踏まえて教材で使用される各種リソースを作成し、コースウェアを組み立てる。ただし、全体を一気に組み上げるのではなく、一部を作成した段階で試用を行い、予備的な評価を得た上で、改善を行いながら進めていく。

(2) 言語バリエーションについての調査研究については、以下の手順で進める。

① これまでの日本語教科書などにはほとんど登場しなかった、中立的でない「はずれた」言語バリエーションについても調査の射程に入りたいと考えているので、対象とする言語バリエーションの範囲を検討する。

② 同時に、役割語や発話キャラクタの発現に関する事例データの収集を行う。

③ 上記2点の検討から、調査対象とする言語現象(パラ言語情報も含む)を決定する。

④ 役割語などの言語バリエーションを含む動画を作成し、これを用いて、なるべく多様な国籍の学習者と日本語母語話者の双方を対象に調査を行う。

⑤ 中立的でない言語バリエーションを含む動画をリソースとして教材化をはかる。

4. 研究成果

本研究では、言語行動場面として「確認する」「意向を訊く」「希望を言う」「申し出る」の4つを対象に教材化を考え作業を進めたが、予備的評価で「希望を言う」について練習がしにくいという指摘があり、最終的にはメニューを減らして「確認する」「意向を訊く」「申し出る」の3つに絞ることとした。

本学習支援システムで位相を意識した日本語使用を促すためには、映像リソースの利用が不可欠である。言語形式のみならず、音調

や非言語行動までも含んだ場面情報全体を提示して、重要なポイントに着目させる必要があるからである。また、システムへのアクセスについては、ウェブの利用を考えているため、動画への円滑なアクセスを保障する手段が重要となってくる。一度にアクセスが集中した場合でも、教材の利用自体はもちろんのこと、システムを搭載しているサーバの運用にも不都合が生じないようにすることが肝要である。また、世界各地から広く利用できる必要もある。以上の条件を考え、本研究では既存の動画サイト”YOU TUBE”に動画を置いてみることにした。これにより、不特定多数が、本研究の学習支援システムとは関係なく教材の動画を視聴できることになるが、そのことがシステムの動作に影響するわけではないので、おそらく支障はないと判断している。しかし、今後も継続的な観察は必要である。

練習には、相手との関係や場面を踏まえて、適切な言語表現（主にスピーチレベル）を選択・表出する力を養うための映像リソースを用意し、短い会話形式の発話練習、適切な表現の選択課題、音調に関する適切性判断課題を作成した。

もう1つの眼目である伝達スキルや役割語の使用に関する調査研究については、映像リソースの作成が難しく、調査に至らなかった。特に「りきみ」や「空気すすり」などの音声的な技巧については、自然で明示的な映像データを取得するのが大変難しいことがわかった。役割語の使用についても、使用可能性が高いと思われる場面の映像データを採取してみたが、なかなか役割語が出現せず、実際使用のデータに基づいて教材のためのリソースを作成し、それを用いて評価調査を実施する、という当初の計画は、実行することができなかった。

ただし、実際使用を下敷きにしたものではなく当初の構想とは異なるものの、役割語を含む映像リソースを4つ作成し、一応、教材化を試みた。研究計画からは大幅にずれ込んでしまったが、今後これらを用いて、学習者による受け止めの調査を実施しようと考えている。

本研究は、全体に研究の進捗が大きく遅れ、研究成果の発表についても、不十分な状態であると言わざるを得ないが、これには、本研究期間の1年めに発生した東日本大震災が大きく影響している。編集中であった動画をはじめ、種々のデータが失われなかっただけでも幸運であったと考えるべきではないかと思っている。研究期間は終了したが、成果については、今後発表予定であることを付言しておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

①才田いずみ Reconsidering Communication Materials in an Advanced Information Society. CLS 10th Anniversary Symposium. 2011年12月2日.シンガポール国立大学(シンガポール)。(招待発表)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
試作システム搭載：NPO 法人科学協力学際センター(<http://www.ccis.tohoku.org/>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

才田 いずみ (SAITA IZUMI)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20186919

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

高橋 亜紀子 (TAKAHASHI AKIKO)
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：10333767
小河原 義朗 (OGAWARA YOSHIRO)
北海道大学・留学生センター・准教授

研究者番号：70302065
井口 寧 (INOUCHI YASUSHI)
北陸先端科学技術大学院大学・情報社会基
盤研究センター・教授
研究者番号：90293406

(4) 研究協力者

呉 正培 (O JEONGBAE)
東北大学・大学院文学研究科・外国人特別
研究員
(H22→H23: 連携研究者)